



けがれ、衛生管理、あるいは癒し

森 明子

(もり あきこ)

本館研究戦略センター

衛生という考え方について

ジュディス・オークリーという人類学者が、イギリスの「ジプシー」(※)のけがれについて、おもしろい研究をしている(旅するジプシーの人類学「晶文社一九八六年」)。

たとえば、石鹸は台所においてはならない。ましてトイレが台所の近くにあることなど、とても考えられない。理由は、台所が身体内部に入るものをあつかう領域だからである。石鹸は身体の外面の汚れとかかわるから、台所にふさわしくない。排泄行為は、台所からできるだけ離れた場所、屋外でおこなうことが望ましい。

「ジプシー」は、身体内部と外部の区分を保とうとしているのであって、その境界が曖昧になることを、彼らは「けがれ」として忌むのである。

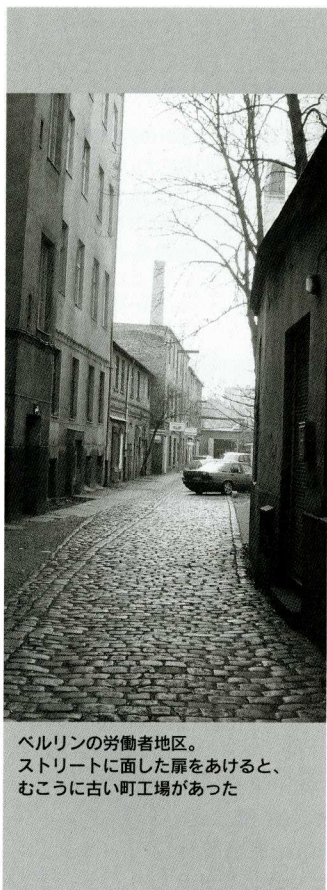
これに対して、白人社会は「衛生管理」によって、「ジプシー」のけがれを制圧しようとする。そこに摩擦がある。

わたしは、トイレの衛生管理に賛成する

者の一人であるが、ヨーロッパ人が、トイレと浴室をひとつにすることにしているのは、かねてから違和感をもってきた。ヨーロッパ人は、浴室をどう考えているのだろうか。

英和辞典でバスルームをひくと、「浴室、化粧室、便所」とある。この三者は、日本では別々だが、ヨーロッパではひとつの空間に統合されているのである。さらに洗濯機が加わり、洗濯場所も兼ねているのがこつである。

ヨーロッパの都市の集合住宅は、一九世紀後半から二〇世紀前半にかけて多く建設された。当初はトイレも浴室もなかった。労働者の家庭にそれが普及したのは一九六〇年代で、それほど古いことではない。トイレとシャワーが、ほぼ時を同じくしてつけられた。シャワーははじめ、貧困が社会問題に衛生が社会道徳になった一九世紀後半のフランスで、衛生管理の装置として発明された。人を立たせておいて上方から水をかける仕掛けがシャワーであり、軍隊と監獄がその起源だった。



ベルリンの労働者地区。
ストリートに面した扉をあけると、
むこうに古い町工場があった

こうした系譜をもつシャワーが、二〇世紀の労働者住宅で、トイレと同一空間に設置されたのは、ごく自然のなりゆきだったかもしれない。まもなく洗濯機が加わって、現在のバスルームの姿ができた。

バスルームは、排泄行為と身体および衣類の清潔をつかさどり、「水まわり」という共通項によって、建築技術のうえでも合理的なまとまりを構成している。

身体を洗う行為

ところで、こういうバスルームを作り出したヨーロッパ人の「日常、身体を洗う」行為は、わたしたち日本人とは異なっている。

わたしたちは入浴を、一日の汚れを落とし、疲れを癒すものとして位置づけている。風呂を使うときも、シャワーで済ませるときも、それは変わらない。だからわたしたちは夜の入浴を好む。これに対してヨーロッパ人は、朝、シャワーを使うことを好む。バスに湯をはって入浴することは稀で、バススタブをもっていない家庭も多い。

バスルームとは、朝、排泄の用を済ませながら、水を浴びて身体の衛生と身支度を整える空間なのである。こう考えてみれば、わたしたちの感覚にはなじまない複数の機能の組み合わせも、衛生空間として合理的に統合されている、といえないこともない。この空間に、「癒し」を求めるのはやめよう。それこそ場違いというものだ。

※ここではオークリーの著作の用語を引用している